

研修報告書

庄原市立比和中学校

教諭 岩本 靖代

1. はじめに

この夏，自分自身の英語力と英語指導技術の向上のため，広島県英語担当教員語学研修に参加した。

日本を離れる前，これからハワイで起こるすべてのことに対して興奮していたのはもちろんだが，同時に想像すらできないあらゆることに対して不安も感じていた。何より日本をそして家族と離れることは私自身にとって大きな挑戦であった。しかし，3週間の間多くの人・もの・場所から，多くのことを見聞き，考えたことで，この研修が私自身の「英語教員」という仕事について深く考えるよい機会となった。研修中問われた「なぜ教えているのか。」という質問の答えについては，これまでほとんど考えることがなかった。そして，今回の研修を通してその答えについて探ることができた。

3週間のハワイでの貴重な体験を通し，私が学んだことや感じたことについて報告したい。

2. 研修について

2.1. 米国ハワイ州立ハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ (KCC)

約3週間を米国ハワイ州立ハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ (KCC) で過ごした。そこには多くの建物があり，さまざまな学科とそのための施設があることがうかがえた。主な学部としては，一般教養学部や美術部，生物学部，経営学部，教育学部，さらにはパフォーマンス・アーツ学部，フードサービス学部など特徴ある学部も多くあり，幅広く学生を受け入れているカレッジである。実際，私たちの滞在した期間にもサマースクールに通う多くの学生がこのカレッジを利用していた。

KCCはダイヤモンドヘッドの麓にあり，山に海にと四方を美しい景色に囲まれたところである。ワイキキのホテルからバスで約10分のところにあり，毎朝その素晴らしい景色を車窓から眺めながら通うことができた。小鳥たちがキャンパスにやってきて，その景色は一層自然の美しさを引き立てた。

私たち3名を主に指導してくださった Malm 教授は，ここ KCC で多くの生徒を教えられており，特に英語を母国語としない海外からの留学生のための英語力強化コースなど海外からの学生を指導されることが主である。毎時間の授業の始めには，話題のニュースや興味をもてそうな新聞記事の切り抜きを持ってこられたり，さまざまな話題を広げようと話しかけてこられたりし，生徒であるわたしたちを和ませてくださった。その Malm 教授の姿には学ぶべき点が多くあった。教員である私たちが，3週間，生徒として時に教員として学ぶことができたのは，これから指導を続けていく上で大いに役立った点である。

2.2. 英語教授法

講義の始めに，Malm 教授が KCC について説明をされた。KCC には，さまざまな種類の学部やプログラムがあり，多くの学生にさまざまな機会を与えている。ここでの授業は，Content-Based Instruction (CBI: 内容中心教授法) で行われている。CBI とは，第二

言語の習得に重要な教授法と言われる。具体的にどのように授業を進められているかを聞いた。たとえば、“Civil Rights in American History (アメリカの歴史における市民権)”をテーマとして選択し、その副題について考える。人権宣言、アフリカ系アメリカ人の市民権の歴史、市民権の歴史と性別問題、障害のある人の民権などである。これらは学習者の興味によりさまざまである。そして、それぞれの副題について定義や意見を書いたり、そのテーマについて話したりとさまざまな活動を取り入れる。一つの話題について、聞き、読み、書き、話していく中でキーワードとなる言語や表現の習得ができるのである。言語を習得する目的は同じでも、文法にばかりこだわらず、一つの内容に絞り、学習を進めていくため、学習者への動機付けにとっては良い方法であることを知った。

2.3. 模擬授業

講義で学習した理論・活動例を参考に、最終日前日に、英語授業の指導案の一部を作成した。そして、その授業の一部を最終日に、「模擬授業」として交流した。十分な時間がなく、授業の中での主な活動のみの交流となった。私は、2年生の単元を使い、話を要約する活動について考えた。生徒の足りない力としては、表現する力である。英文を読んで内容の理解はできるが、英語を用いて理解した事実や自分の気持ちを伝えることが苦手である。その原因としては、多くの生徒は文の構造について理解が十分でないと考える。しかし、文法や文構造にとらわれすぎると、楽しく表現することを忘れ、英語嫌いを増やしてしまうことになる。そこで、ピクチャーカードを用い、話のあらすじを絵や文字から理解できるように活動を考えた。多くのヒントや例文を生徒に与えることで、生徒の負担を減らし、生徒がリラックスして表現できるということも、この研修を通して改めて感じた点である。

他の参加者の指導案についても意見交流し、それぞれが抱える生徒実態や生徒の課題について配慮し、活動を仕組むことの大切さを感じた。同時にたった一つの単元も、授業する者、授業を受ける者によって何通りもの活動を作ることができることが分かった。Malm教授も加わり、活動の良い点・改善点や意見をアドバイスしていただき、教師の視線と生徒の視線の両方から模擬授業の活動を振り返ることができた。

2.4. プレゼンテーション

研修の最終課題は、お世話になった教授や学長の前で英語によるプレゼンテーションをすることであった。まずは、テーマを決めることに苦労した。講義を通して、新しく知ることも多く、次々と耳や目に入る語、フレーズが飲み込みきれず、頭の中は整理できなくなっていた。ここで、書くための準備として、フリーライティングやブレインストーミングをし、テーマを絞った。そして、アウトラインを決め、フリーライティングからレポートへとまとめた。一つ一つのことが初めての経験で、それを英語で発表するという一方でさらに緊張した。「本当にできるのか」という不安ばかりが頭をよぎっていた。

研究のテーマは、自分自身の日頃の問題点から「レベルの異なるクラスにおける書く力の向上と自己表現の促進についてどのように進めるか。」とし、参考文献を探し、読み、発表のための文章をまとめた。しかし、参考文献を読んで理解するだけでかなりの時間が必要であり、Malm教授に何度も質問をしなくてはならなかった。理解ができると、自分の

意見をまとめた。しかし、プレゼンテーションでは書いたことをそのまま読むわけにはいかない。自分の言葉に置き換えながら、聴衆に伝えなければならない。発表前日の深夜、原稿はまとまらず、緊張は高まるばかりであった。

最終日、Richards 学長を始め、コーディネーターの Tsurutani 教授、Sato 教授、ハワイ教育委員会の Mr. Tekilato と Mrs. Okimoto、学内で知り合った Gaston 先生と多くの方が集まってくださった。Malm 教授のサポートの下、私たちはついにプレゼンテーションをやりきった。午前中のリハーサルのおかげで少し落ち着いて発表をすることができ、また参加者の温かいまなざしに勇気をもらい、なんとか終わらせることができた。信じられない瞬間であった。発表後、続々と感想や質問をもらい、私の発表もしっかりと相手に伝わっていることを知ることができた。

3. ホームステイについて

研修第1週目の週末にホームステイをした。今、振り返ると、自分がいかにホームステイに対して受け身の姿勢でいたかを反省してしまう。ホームステイ先にお世話になる日の昼食の時間に、ホームステイ先についての情報を初めて聞いた。Manoa という山間の町に住んでいること、ロシア出身のホストマザーであること、10歳の男の子のいることがわかった。自分の子供と同じ世代の子をもつ家庭であり、望み通りだと喜んだ。

ホストファーザーの迎えで、家に到着すると男の子アレックスが2匹の犬と一緒に私の到着を待っていてくれた。家族はゴールドンレトリバー2匹と暮らしていた。家にある広い窓からは海岸や山を見渡すことができ、静かな落ち着いた環境の中に家はあった。

夏休み中の彼は、日ごろから一日家で留守番をすることも多く、その日は家の掃除をして待っていたと聞いた。日本で10歳の男の子が一人家で一日留守番をするということがあるのだろうか。少し驚いた。更に驚いたのは、翌日は土曜日でもあり家族みんなで過ごせるのかと期待していたが、二人とも仕事に出かけてしまったのである。アレックスが私の食事を準備してくれた。一日中、日本から持ってきた折り紙や竹トンボで遊んで過ごした。アレックスは喜んで、折り紙に挑戦し、さらに違うものも折りたいとインターネットで折り方を検索し始めた。このとき、私にはインターネットで検索するという手段は頭になく、また日本から折り紙の本を送ろうと一人考えていた。

予想もしなかった10歳の子との長い時間は、新しい発見もあり充実したものとなった。

2日目、ホストファミリーの友人の誕生パーティに出かけた。初めて家族全員がそろった時間だった。友人もロシア人だった。彼女の息子や友人が集まっていた。ハワイは住みやすいから、海外からも多く人が移り住んでいること、財政難で物価が高く引越しを考えていることなど話を聞くことができた。実際にハワイの家庭に入り、少し詳しくハワイの生活を知ることができた。

最終日、家族から近くにあるマノア滝に行こうと誘われた。5分くらい車で行ったところに現地では有名な滝があった。往復約1時間の山道をホストファミリーと登った。途中多くの観光客とすれ違いながら、ジャングルを思わせる大きな木々や葉っぱをくぐり、山頂付近の滝をめざした。森林浴をしながら、心地よい汗をかいた。

家に戻ってから、何もかも受け身になっていた自分に気が付いた。ハワイの文化に触れるチャンスと思い、積極的に会話をもつことは心がけていた。しかし、自分は客ではなく

家族の一員だったのということに気付いた。何の気兼ねもなく過ごすことができたのも、私を家族として受け入れてもらえていたからだ。やっと、渡しそびれていた日本からのみやげを家族に渡し、ゆっくりと話をする時間がもてた。

日本に帰ってからも、ハワイの家族にもう一度しっかりお礼を伝えたいと思った。

4. フィールド・トリップについて

Malm 教授の案内で3週目の月曜日、プランテーション・ヴィレッジとビショップ・ミュージアムを訪れた。この旅行は、私の中で最も印象に残ったことの一つである。

プランテーション・ヴィレッジでは、ハワイの歴史について学習することができた。なぜここまで多くの国々からハワイに移り住む人ができたのか。その始まりを見ることができた。それぞれの国からそれぞれの文化をもち込んだ人々は、やがて生活をするため協力をし始めたという説明を聞き、とても印象に残った。人は何らかの方法でコミュニケーションをとろうとする生き物であることが分かった。それぞれの良いところが尊重されたことが今もなお、ハワイに残る日本文化や他国の文化をみると理解できた。

ビショップ・ミュージアムでは、カメハメハ王朝の歴史について触れることができた。一通りの説明を聞くだけでは理解しきれず、もっと知りたいと興味をもった場所であった。見学後、レイを作ったり、フラダンスを踊ったりとハワイの文化にも触れることができ、忘れられない一日となった。

5. おわりに

ハワイは、私が以前からずっと訪れてみたいと思っていた場所であった。予想通り、日本には経験のできないことばかりの3週間であった。日本での生活は、毎日が慌ただしく過ぎ、自分の生活や自分を取り巻く人々についてじっくり考える余裕はなかった。しかし、ハワイでは日本を離れ、家族と離れ、いろいろな面で自分を見つめ直すよい時間がもてた。大変だった研修も無事3人そろって終わりを迎えることができた。それは、やはり1人ではなく3人で一緒にできたからだということを経験した。さらに、この研修を支えてくださった Malm 教授、コーディネーターの Tsurutani 教授を始め、KCCの先生方の温かい言葉かけが何よりも励みとなった。研修の進み具合、ホテルでの生活、休日の過ごし方など、いつも気にかけてくださった。最終日の夜、ホテルで修了式をしていただき、修了証を手にする事ができた。そして、「君は、オハナ(家族)の一員だ。」という言葉をかけてもらい嬉しく思った。これからの生活に生かしたいもの、それがその先生方の姿勢であることを最終日、私自身が強く感じたことである。常に心を開き、新しいことを受け入れ、共有する姿勢は私がここハワイで感じたハワイの良さである。多くの場面で様々な人が協力し、お互いを認め、尊重している雰囲気を感じられた。これがオハナ精神だということが分かった。教室にオハナ精神とその環境があれば、生徒も安心し、のびのびと楽しく学習できるのだろうと思う。

最後に、今回の研修の機会を与えてくださった広島県教育委員会をはじめ、研修をともにした先生方、そしてハワイで出会い、お世話になったすべての方々に心から感謝したい。